The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ミードとプラグマティズム
Author(s)	小林, さや香
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 29-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7757
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第7号（2002年）
Annals of Educational Studies Vol.7

ミードとプラグマティズム

小　林　さや香

【要旨】

G.H.ミード(George Herbert Mead,米1863-1931)は、C.S.パース、W.ジェームズ、J.デューイと共に四大プラグマティストの一人として知られている。それぞれのプラグマティズムは、共通の基盤をもってはいるが、そこから展開される思想はそれぞれに異なったものである。

そこで本稿では、プラグマティズムに共通する基本的な態度と、そこから展開されたミード独自のプラグマティズムを明らかにしたいと思う。今後ミードの思想を読み解いていくためには、その基礎となるミード特有のプラグマティズムを見ておくことが不可欠だからである。ミードのプラグマティズムの特色は、具体的には彼の(1)コミュニケーション論、(2)行為論、(3)時間論、(4)パースペクティヴ論、の内に見ることができる。これらを分析していくことによって、社会との複雑な相互作用の中で不確定な在り方をする人間像を描き出したミードの思想の源を見いだすことができる。

はじめに

本稿の目的は、プラグマティストとしてのG.H.ミード(George Herbert Mead,米1863-1931)に注目し、ミード独自のプラグマティズムの特徴を明らかにすることにある。

かつて、プラグマティズムの哲学者といえば、C.S.パース、W.ジェームズ、J.デューイの三人の名があげられることが多かった。ミードが注目され始めた当初は、自我論を中心に扱う心理学者として、またはコミュニケーションを通じた人間形成と社会改革に関する理論をうち立てた社会科学者として扱われていたのである。しかし1960年代以降のミード・ルネッサンスにおいて彼の業績が広く研究されるようになり、先に挙げた三人と並んで四大プラグマティストの一人に数えられるようになってきている。

四人のプラグマティズムはそれぞれに内容が異なっており、ミードは独自のプラグマティズムから自我論や時間論、コミュニケーション論や社会改革論を形成した。そこに、パースのコミュニケーション論との違いや、ジェームズの＜Ｉ＞と＜ｍｅ＞概念との違い、デューイの反射弧概念との違いがある。したがって、今後ミードの思想を読み解いていくためには、その基礎となるミード特有のプラグマティズムの特徴を見ておくことが不可欠なのである。

そこで本稿では、はじめにプラグマティズムの成立とその背景を簡単にまとめ、その次にミードのプラグマティズムの特色を明らかにしていくことにしたい。

1，プラグマティズムの成立

（1）思想的転換の帰結としてのプラグマティズム

ミードが生きた時代は、社会的、思想的に大きな変革が起こった時代であった。たとえば、創造論をはじめとする伝統的な世界観がダーウィンの『種の起原』（1859）と『人類の由来』（1871）によって大きく揺るがされることになった。それに加えて、産業革命をきっかけとする社会変革とそれに対応する思想変革が進んだ時期でもある。そうした変革の産物として、西欧ではマルクス主義、実存主義、分析哲学が、アメリカではプラグマティズムが生まれたのである。

プラグマティズムは1870年代の初頭、ピューリタンの根拠地であるニューイングランドの一角で成立をみた。命名者は記号論の創始者として注目を集めているパースである[1]。当時のアメリカでは、建国の基盤であったピューリタニズムの生活信条と、産業革命によってもたらされた科学・技術を重視する合理的な行動様式との摩擦が著しくなっていた。プラグマティズムはそうした社会状況を背景として生まれた。

つまり宗教と科学との間の矛盾を暫定的に調停し、それによって産業活動の効率を高めるものとして、またそれと同時に産業化・都市化の過程で生じる人種間の対立やスラムの出現といった社会問題に対処しうるような「哲学」として要請されたのである。そこからプラグマティズムは、改良主義的・人間主義的道徳論による社会改革をその職務の一端とすることになる。

プラグマティズムの基本的な発想[2] はパースの実験科学者の精神から生まれた。ここでいう実験科学者の精神というのは、「自分ならびに他人の意見を、常に、まちがっているかも知れぬものとして把握する」という姿勢と、「哲学的意見でもなんでも、意見の意味を常に、ある実験条件と結び合わして考える」(鶴見1986,42頁) という姿勢に代表される。自然科学の実験室で長く過ごした人間は、どんなに慎重に実験を行ってもつきまとう誤差や誤りゆえに、自分の意見に対して謙虚になるのである。こうした考え方は、研究対象となる命題や概念に対してだけではなく、プラグマティズムの在り方そのものにも適用される。したがってプラグマティズムは固定した体系をもつイデオロギーではない。「プラグマティズムはなんら特殊な結果を現すものではなく、それはただ一つの方法であるにすぎない」(W.James1907,p.31) [3] のである。その方法とは、どんなに広く信じられている命題であれ常識であれ「批判と再吟味の対象」とするという方法であるが、その方法そのものも常に「批判と再吟味の対象」であり続けるのである(長尾1983,126頁)。

こうした考え方は、「リサーチ・サイエンス」という形でミードに引き継がれている。ミードの定義によれば「リサーチ・サイエンス」は、「世界全体についての体系的な説明を与えようとするものではなく(MT,p.264) [4]、「絶えず新しい問題を追い求め」、「こうした新しい問題に応じて新しい仮説を見いだす」(ibid,p.354) ものであり、「いかなる時にも私たちの探求を導く理論そのものを解体しようとする意識的な努力に関わるもの」(ibid,p.xxx)である。そしてこれが、「プラグマティズムの理論が哲学的に表明してきたもの」である、とミードは言う。ミードのこうした姿勢は、後に述べる彼のプラグマティズムにおいてより鮮明になるであろう。

(2) 進化論からの影響

進化論の影響をうけたプラグマティズムは、「不変の全体」としての対象ではなくむしろその運動、変異、多様性を前提とするものであった。この世界が常に進歩し変化していくという観念、その変化を種とその環境との関係を含む自然全体の包括的把握によって捉えるという見方を、進化論から受け継いだのである[5]。たとえば先の、あらゆる命題は再吟味され訂正されていくという考え方も、生物と同様に世界も進化しつつあるという発想に基づいている。

そこからプラグマティストたちは、人間の諸活動は、精神的活動も含めて、進化の過程において発生してきたものだと考えた (油井1988,176-177頁)。人間を自然の一部と考え、他の生物との連続で捉えようとする、進化論に基づいた発生論的アプローチである。プラグマティズムは、精神活動も自然から発生したものと考えることで、それまでの人間の行動に関する超自然的、超経験的説明を否定するのである。ミードは (デューイにも共通するものであるが)、「自然と人間の本性についてのこの新しい捉え方の中に、それまでの自然主義を移植」しようとした。つまり、多様性と可変性を基底とする自然や人間を、実証主義的に、具体的には行動主義的に捉えようとしたのである[6]。

しかし長尾によれば、「進化」思想がもたらした最も重要な影響は「進歩を有機体と環境との絶えざる適応過程とする捉え方」(長尾1983,127頁) であった。ジェームズはその適応過程としての行為を人間の活動の反射作用と見なし、またデューイは環境に対する「調整」機能と考えて機能主義心理学の先駆けをなした。ミードはこの機能主義心理学を採用する。精神の全体性を捉えようとしたミードは、精神を構成要素の結合と見なす構成的心理学に違和感を持ち、環境への適応を促すという機能の観点から精神をとらえる機能主義心理学を重視したのである[7]。そしてさらに、この「個体と環境との相互関係」という視点から独自の「相互作用論」を築いていった。

後の展開の仕方は各人様々ではあるが、行為を重視する点はプラグマティストに共通の立場である。そして、環境に対する適応能力を核とする行為の重要性を彼らに認識させる契機となったのが、進化論であ

った。

こうした態度をもつプラグマティズムにとって、知識は常に生活実践における有効性において、つまり実際の行為過程で経験的に確認できるものとして理解される[8]。「知識は行為の一部である」(MTp.351)というのが、プラグマティズムの基本的な立場である。したがってある「知識」が問題解決のための行為へ向かうものでない場合は、抽象的で無用なものとされる。プラグマティズムのこうした考え方は、「知識」とはそれを持つ人の生きる状況で活かされてこそ「知識」なのだとするフロンティア・スピリット時代のアメリカで好意的に受容され、広く浸透することになったのである。

行為に対するこうした発想は、彼らの「真理」観にも表れている。例えばジェームズは、真理とは「解釈の遂行」であり「それを遂行した人の満足」であると考えた。またミードやデューイは、真理とは問題解決と同義語であると考える。個人と環境との間に不適応という問題状況が生じた際に、人間は知性を含む行為によって新たな仮説を形成し、問題を解決する。問題が解決され状況が再構成されたとき、仮説は真理となる。真理の基準は、思考の内部でなくリアリティの中に、行為との関係において存在するのである（船津1989,148-149頁）。

本節のはじめにも述べたとおり、プラグマティズムは各思想家の問題関心によって多少とも強調点を異にして表現された。しかし変化と多様性に基礎を置いて世界をまなざす点、認識における実践的側面（主に行為）を重視し、デカルト以来の内観に基礎をおいた認識論的図式に対して批判の目を向けた点、そして社会問題を改良主義的・人間主義的道徳論によって解決していこうとした点では一致していたといえるであろう。これらを踏まえて次節では、他のプラグマティストたちとは区別されるミードの思想の特徴についてまとめてみたいと思う。

2，ミードのプラグマティズム

プラグマティズムには二つの主要な拠点があった。ハーバード大学とシカゴ大学である。ハーバード大学では、ジェームズが「神の摂理一辺倒の超自然主義と、機械主義一辺倒の自然主義のいずれからも脱却」しようと探求を続けていた。彼はこの試みを時間論、多元論、根元的経験論によって達成しようとしていた。一方のシカゴ大学では、デューイを中心としてシカゴ学派が形成さた。そこでデューイは、道具主義や実験的概念論を唱えてパースとジェイムズを総合すると共に、倫理、教育、政治などの領域で思想を具体的に展開して、アメリカの現実生活に多大な影響を与えた。そして、ミードはハーバードでジェームズに師事し、シカゴではデューイとともに新しい探求を続けるなかで、彼らと共通の基盤をもちながらも独自の思想を展開していったのである。

（1）コミュニケーション論

鶴見は、ミード哲学をそれまでの近代哲学と比較して次のように述べている。「デカルトの『方法序説』が、夜の閉ざされた部屋の孤立を思考の場としてもっているのにたいして、ミードの『精神、自我、および社会』は真昼の野原で動物とともに人間が対立し平行してお互いに身ぶりで共同の作業をしているところを思考の場としてもっている」（鶴見1986,133-134頁）。デカルトに始まる近代の哲学が孤立した個人というものを措定していたのに対して、ミードの「自我」は常に社会のなかにある。「個人」も「自我」も「精神」も「経験」も、発生の時から社会的なものとしてあり、「コミュニケーション」を通して出現する。人間の精神現象を分析する根本的なカテゴリーは「コミュニケーション」なのであり、鶴見はこのようなミードの哲学を「コミュニケーションの哲学」と呼ぶ（同上133頁）。その性格はパースにもジェームズにもはっきりしていないもので、ミードとともに出現したものである。

たしかにパースは独自の記号論を構想しており、コミュニケーション論を生み出す萌芽を持っていたともいえる。しかし彼の関心は、記号が指示する対象とその記号から導き出される解釈にあるのであり、コミュニケーションによる他者との相互作用という点には目を向けていない。パースにとって記号は不都合な事態を解消するための思索(inquiry)の道具にすぎず、彼の記号論は個人の中で完結してしまっている。

たしかにミードも記号を用いた反省的思考による問題状況の解決こそが人間の知性であるとしており、この点ではパースとの共通点が見られる。しかしミードにおいてその反省的思考は、他者とのコミュニケーションを通じて有意味な会話を内面化することによってはじめて可能になると考えられている。つまり、たった一人で思考するときであってもその思考は他者とのコミュニケーションを基盤に成り立っているのであり、ミードの記号論、意味論は常に他者に向かって開かれているといえる。コミュニケーションを基盤に持つ反省的思考こそが精神の本質であり、反省的思考によって自分自身を反省の対象とすることができるようになると自己意識や自我が発現する。こうしてミードは、コミュニケーションを精神の発生の基盤とする「コミュニケーションの哲学」を構築したのである。

(2) 行為論

行為を中心として個人と環境の関わりをみるプラグマティズムの立場は、もちろんミードにも深く浸透している。行為の重視は、主／客の分断を統合する理論の形成をミードに促すことになる。

ミードは、環境との不適応を解消するという問題解決の試みとしての行為、というプラグマティズムの行為論をさらに細かく分析する。ミードにおいて人間の行為は衝動（インパルス）によって発動し、数多くの刺激の中から反応すべき刺激を選んで反応することによって成り立つものである。ミードによると、行為には「衝動」「知覚」「操作」「完了」の四局面がある。その衝動は、基本的には生存を保持することへの欲求に基づいている。そして人間において最も大きな役割を果たすのは「知覚」である。「知覚」は対象の選択という積極的機能を有し、行為を導くものである。この四局面はひとつの流れを成しており、すべての局面に精神的過程と生理的過程の双方が含まれている。行為は、精神的過程と生理的過程を含む目的的な過程として捉えられるのである。ミードにとっては「身体の内部で起こるすべてのことは行為」なのであり、感情などの心理的過程も「行為の準備という観点、そして進行するものとしての行為そのものという観点から」扱うことができる（MSSp.21）。そして生理的過程と心理的過程の双方に対して行為という見地からアプローチすることで、二者間の相関関係を検討できるようにしようとした。そうすることによって、分断された心身を統合しようとしたのである。

ミードはこのように、人間の精神的過程を社会における行為という観点から説明しようとした。精神的過程も含めた人間の行為は、動的な全体としての進行中の社会過程の一部であり、複雑な有機的過程として捉えられる。ここからミード独自の行動主義が形成されることになる。それは、「動的で進行中の社会過程、およびその構成要素である社会的行動から出発する」(ibid,p.7)という意味で、「社会的行動主義」(ibid,p.6)と名付けられた[9]。このように精神の全体性をとらえることによって、還元主義的心理学に異議を唱えただけではなく、単に刺激に反応するだけの受動的な人間像を否定して、自ら刺激を選択して反応するという能動的存在として人間を描きだそうとしたのである。

ミードの行為論の独自性は、プラグマティズム特有の行為概念を知覚と関連づけて発展させたところにもある。彼は人間を、行為によって環境によって選択的に知覚する能力を備えた存在としてみていた。つまり「個々人によって経験される環境は、個々人の行為の変化に応じて必然的に変形され、それ故環境を構成する諸事象もその意味内容の不断の再構成を被る」(PA,pp.159-165）[10] のである。ミードによれば「物理的対象は、自然に対する社会的反応から作られるひとつの抽象にすぎない」（MS,p.184）。つまり「行為が諸事象の出現に先行」しているのであり、対象は「行為によって方向付けられる」ことによって初めて対象として現前するのである(PA,p.166)。このことに関連してミードはさらに、人間の身体（特に手）が環境の再構成に大きな役割を果たしていると指摘する(MS,p.248)。長尾はこの指摘が「ミードは対象を構成するものとしての身体の重要性を既に認識していた」（長尾1983,139頁）ことを示している点で、ミードの先見性を証明するものであるとしている。

知覚が行為によって常に再構成されていくものとすれば、ミードにとっては知覚も、社会的な反応のひとつなのである。対象の知覚は対象世界の構造に関する社会一般の了解を獲得することによってなされる。つまり、他者の役割を取得し社会化されていく過程で、対象を構成するものとしての身体の使用能力も獲得されるのである。こうしたミードの行為論は、自我論とも結びついて、複雑で不確定な人間像を描き出

す端緒となるものである。

（3）時間論

ミードの独自性は、その時間概念にも表れている。あるのはただ現在だけである。その現在を捉えるのに、我々は未来のプログラムを作り、さらに我々にとっての過去を作る、というのがミード独自の時間論である。彼によれば、人間は、現在の行動を決める際に過去を再構成すると同時に未来を既にイメージしている。このことは、過去と未来が現在を一義的に決定するということを意味するものではない。現在の状況で適切に機能する行為を生み出すために、過去と未来を利用するのである。あくまでも「リアリティは現在の中に存在している」(PP,p.1）のである。「過去は、未来と同様に仮説的」（ibid.p.12.）なのであり、現在という視点から再構成される。

過去が現在という視点から再構成されるというと、都合の悪い事実を改訂していく独裁者を連想するかもしれない。しかしミードの過去論は、二つの点で独裁主義とは異なっている。ひとつは、過去についての記録は抹殺されることなく、すべて活用される状態が常に確保されているということ、もうひとつは、今正しいと決めたこの唯一の過去だけが正しい過去の像だという前提を立てないということである。ミードは、予測不可能な新しい出来事が現在において出現すると考えた。そうすると、これまで予測しなかった新しいことから見て、過去は常に新しく構成されなくてはならない。過去の資料を保存したまま、それに新しい資料を加えることを通して過去の意味を新しくしていく。それぞれの現在が、それ自身の過去と未来を持つことになるのである。

過去と未来はともに「現在に属し」、現在によって「批判されまたテストされる」（ibid.p.88)、という考え方には、ミードの「リサーチ・サイエンス」の発想が生きている。新しく現れた現実に対して過去と未来は常に開かれており、既に確定したものとしてあるように見える過去も、やはり常に「批判と吟味の対象」であり続けるのである。そして、過去と未来との現在における暫定的調停を試みるミードの考え方は、「発展する社会にあって従来の世界観と来たるべき世界観との調停を目指すプラグマティズム」（長尾1983,138頁）を発展させたものといえるだろう。

（4）パースペクティヴ論

ミードの理論が1941年に日本に紹介されたときには、『世界全体主義大系』の中に含まれていた。おそらく国家の社会性に個人の自我を一体化させるための理論的示唆として用いられたのであろう。しかしミードの思想には全体主義やファシズムへの親近性を示すところはない。そのことをよく示しているのは、彼の「パースペクティヴの実在性」という考え方である。絶対的観念論が「個我のパースペクティヴ」を単に主観的で実在性のないものとしたのに対して、ミードはこれを客観的実在と見る。これは、個の実在性の消滅をはかる全体主義とは対極に位置する主張である。「個」のパースペクティヴは他の自我の立場から自分の自我を見ることによって成立するのであり、自我の成立そのものがいくつものパースペクティヴの組織化の原理として働くのである。また彼は自我の主体性を強調しているが、そのこともミード自我論の全体主義との親近性を否定するものである。

ミードは「人間の本質」というものを決して措定しようとしない。思想界の風潮としては、ルソー以来、疎外されて非人間的なものになっている人間を、本来の姿に帰さなければいけないと考えられてきた。しかしミードにおいて人間は、現在の必要に応じて個人や集団のパースペクティヴをつくる存在なのである。したがって人間が目指すのは、「本来の姿」ではなくパースペクティヴのより高度で普遍的な組織化である。しかしそうしてつくられた新しいパースペクティヴも限定された自我によって担われているのであり、パースペクティヴとしての限界を超えることはできない。

ミードにおいては「真理」も「本質」と同様に、個別的状況に結びついたものである。したがって、現実においては多くの真理が存在することになる。先に述べたとおり、ミードにおいて真理は問題解決と同義である。問題状況において状況が再構成され、新しい仮説が採用されたとき、その仮説が真理となる。真理はリアリティの中にあり、常に変革を迫られているのである（船津1989,148-149頁)。

もともとプラグマティズムは絶対的に真なるもの、絶対的に根元的なものの存在を措定しない。すべての命題は後人の追実験によって否定される可能性をもっている。そうした考え方が、ミードのパースペクティヴ論によって確立されたといえる。

以上でみたように、ミードはプラグマティズムの考え方を受け継ぎながら独自のやり方で発展させた。船津衛は、ミードのプラグマティズムの独自性をまとめて次のように述べる。「ミード・プラグマティズムの独自性は、人間の行為の内的側面を解明し、とりわけ、それを身振り、シンボル、コミュニケーションによって社会的に形成され、展開するものと考え、さらに、人間の形づくる社会が動的、過程的存在であることを強調したことにある」(船津1989,146頁)。またマーフィー(1932) は、人間が他者との相互作用の中で新たなものを生み出し社会そのものを変革していくという点から、ミードのプラグマティズムは「構成的プラグマティズム」であるとしている。そして三橋(1991)は、「彼の功績はプラグマティズムそのものの追求によりも、プラグマティズムの社会的な具現、すなわち自我の社会性、そのコミュニケーションを通して得られるパースペクティヴの成立とその相対性を示したところにあった」(三橋1991,61頁) と述べる。

ミードのこうした思想は、彼の自我論において具現化されている。特に、コミュニケーション論と行為論が、彼の自我論を支えているといえる。そうして形成された彼の自我論は、デカルトに始まる心身二元論、主客二元論を克服し、複雑で不確定な人間の姿を描き出すものであった。しかしそうしたミード自我論の豊かな実りについては、稿を改めて論ずることにしたい。

<注>

1) しかし実際は、パースは自らの哲学をプラグマティシズムと呼び、他からきびしく区別したといわれる (鷲田清一、1988「ジェームズ」『現代哲学思想事典』今村仁司編、講談社現代新書、p.604、参照)。

2) 以下に、パースの哲学の方法論上の特徴を鶴見の解説にしたがってまとめる。

・批判的常識主義(critical common-sensism)

人々にとって「疑い得ない信念」というものが存在するが、それは「今日この場で思索するわれわれにとって疑い得ないという程度のもの」にすぎないのであり、永遠に批判を排するものではない。

・マチガイ主義／(早川操によれば可謬主義) (falliblism)

絶対的な確かさ、絶対的な精密さ、絶対的な普遍性などは経験的知識の達し得ないところにある。われわれの知識はマチガイを重ねながら、マチガイの度合いの少ない方向に向かって進む。マチガイこそは知識の向上のための最もよい機会である。そして、ある事柄を絶対的に断言すること、ある種の事柄が知り得ないことだと言い切ること、ある意見または命題が、それ以上掘り下げられない究極的なものであると主張すること、ある法則または真理が最終的かつ完全に定式化されたと断言すること、これらの習慣は人類の思索の道をふさぐ障害となる。

・プラグマティズムまたはプラグマティシズム(pragmatism, pragmaticism)

抽象的な概念は実験され得るような形に直されるとき初めて意味がはっきりする。仮説を選ぶときにも実験され得る形に直らないものは採用してはいけない。仮説を選ぶ際の規準としては、実験されうるというだけではなく、なるべく簡単な仮説を選ぶようにするべきだ。簡単な仮説とは、最小数の概念を含むというだけでなく、人間の精神にとって自然な概念を最も多く含む仮説である。

・便宜主義

科学的思索の結果として現れる真理なるものは、科学者の社会によって審査された上で公認される。この場合科学的知識は、その時その場所の科学者集団にとっての社会的便宜によって決定され る。違った形式で提出された意見が実は同じ意味を持つことがわかったときは、論理実証主義の立場からいえばどちらの意見を採用してもいいのであり、どちらを選択するかは便宜主義にゆだねられる (鶴見、前掲書、pp.42-45、参照)。

こうした考え方、特に抽象的な概念を科学的に扱おうとするプラグマティズムの姿勢や、真理に対する考え方などは、ミードの思想にも色濃く受け継がれている。

3) James,W., 1907, Pragmatism, eds. Ch.Hartshorne and P.Weiss, Cambridge: Hervard University Press., p.31. 桝田啓三郎

訳、1957『プラグマティズム』岩波書店、p.43。長尾真理、「G.H.ミードとプラグマティズム—時間論を基軸として—」『哲学』第76集、p.125より引用。

4）ミードの代表的な著作に関しては、参考文献の欄に示す略称を用いることにする。

5）進化論が与えた具体的な影響の帰結のひとつは「社会的ダーウィニズム」である。これは、自由経済の形成にともなって現れる人間の非人間性を、生存への戦いに内在的なものとして、または進歩のための不可避の条件として正当化するために、「適者生存」や「自然淘汰」の考え方を利用したものである。

もう一つの影響は、クロポトキンの『相互扶助論』に代表されるもので、種の形成、および精神、人間、人間関係を視野に含む自然全体の包括的把握についてのダーウィンの洞察を深化させようとするものである。

6）岡本は行動主義を三つに区別している。一つはワトソンのように精神を理論から除外してしまうもの、二つ目は多くの新行動主義のようにア・プリオリに存在するものとしての精神を回復するもの、最後はミードやスキナーのように精神そのものを行動によって説明するものである。そして岡本はミードの行動主義について、「このうち社会学が本質的に心理学に介入する契機をもっているのは第三のものだけである。ミードは第三のタイプの行動主義によって、心理学の領域に本質的な形で社会学を持ち込んでいる」と述べている（岡本祐介、1992「G.H.ミードの行動主義と『I』の他者性」『ソシオロジ』37(2),p.79、参照）。

7）機能主義心理学と構成的心理学は互いに対立するものとされている。構成的心理学は生体の統一的体制は神経系統の機能に依存していると考え、経験と神経過程を等価と見なす。意識過程を構成要素に分解しその結合の法則を明らかにする点では、連合心理学と同じである。しかし意識は知覚を通じて想起された観念の連合であると説明する連合心理学とは異なり、構成的心理学は意識過程と神経過程の相関のうちに意識の生起の科学的原因を求めていく（高橋澪子「機能主義／機能的心理学」「構成的心理学」『心理学事典』,p.165,251）。

全体性を重視するミードは、他の要素主義的な理論にも同様に反発した。たとえば自我を知覚の束と考えるヒュームの感覚原子論や、すべてのものは単純なものの複合体であるというラッセル、ヴィトゲンシュタインの論理的原子論にも反対であった。自我全体は、単なる構成要素には還元できない、それ自体で特別に働くものなのである。

8）そこから、知識を実践に役立つ道具として捉えるデューイの「道具主義」が展開することになる。

9）このようなミードの方法論について油井(1986)は、人間の経験的事実を自然主義的アプローチによって洞察しようとしている点で、自然主義から主意主義への過渡期に位置していたといえると述べる。油井(1986)によればミードは「プラグマティックな自然主義」（油井1986,174頁）者だったという。これは、精神的現象に対しても超自然的なものに依拠せず観察と経験にもとづく理由付けを与えるという実証主義的自然主義と、「精神や思考は、社会的行動と物理的な事物とをふくむ、適応的行動という観点のみから説明することができる」(Miller1973,p.3）というプラグマティズムのテーゼとが結びついたものである。

ミードの思想は自然主義的である一方で主意主義的でもある。第二章で詳しく説明する予定であるが、ミードにおいて人間の行動とは、反省的知性を用いて自分自身を一定の社会構造に適応させたり社会構造に働きかけて変化させたりするものである。つまりミードは、社会に適応したり働きかけたりするという人間の意志に着目していた。人間の行為を環境－有機体の関係において実証主義的に捉えようとする一方で、環境そのものを選択する生物体としての人間を捉えようとする主意主義的側面も持っていたのである。

10）Mead,G.H. 1938, The Philosophy of the Act, Chicago:University of Chicago Press, p.159-165.長尾、前掲書、p.139より引用。

＜参考文献＞

Eames,S.M. 1977, Pragmatic Naturalism, Southern Illinois University Press,

Dewey,J. 1922, Pragmatic America, first published in New Republik, vol. 30, printed in The Middle Works of John Dewey, 1983, vol. 13, ed. Jo Ann Boydston, Southern Illinois University Press

James,W., 1907, Pragmatism, eds. Ch.Hartshorne and P.Weiss, Cambridge: Hervard University Press., 桝田啓三郎訳、1957『プラグマティズム』岩波書店

Mead,G.H., 1932, The Philosophy of the Present, Chicago:University of Chicago Press.(PP)

Murphy,G.H., 1932, Introduction to Mead,G.H., The Philosophy of the Present.

Mead,G.H. 1934, Mind, Self and Society, Chicago:University of Chicago Press.(MS)

Mead,G.H.,1936, Movements of Thought in the Nineteenth Century, Chicago: University of the Chicago Press.(MT)
Mead,G.H. 1938, The Philosophy of the Act, Chicago:University of Chicago Press.(PA)
H.M.カレン、1983(1956)「序文」『G.H.ミードの動的社会理論』(長田攻一、川越次郎訳) 新泉社、
上山春平、1974『世界の名著４８／パース、ジェイムズ、デューイープラグマティズムの哲学』中央公論社
鶴見俊輔、1986『新装版 アメリカ哲学』講談社学術文庫
長尾真理、1983「G.H.ミードとプラグマティズム—時間論を基軸として—」『哲学』第76集
船津衛、1989『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣、
船津衛、2000『ジョージ・H・ミード—社会的自我論の展開—』東信堂
三橋浩、1991「プラグマティズムは滅びず」『現代思想のトポロジー』里見軍之編、法律文化社、52-65頁。
山下祐介、1996「G.H.ミードの思想発展—伝記的背景と公刊論文から—」弘前大学人文学部『文経論叢』
油井清光、1986「G.H.ミードの学史上の位置」『神戸大学 文化学年報』vol.7

Mead and Pragmatism

KOBAYASHI Sayaka

G.H.Mead(George Herbert Mead, USA,1863-1931) is known as one of four famous Pragmatists like C.S.Pearce, W.James and J.Dewey. Each had developed their own theories differently, though they have a common basis.

This paper tries to make clear that what common basis of Pragmatisms is and what Mead's original Pragmatism is which developed from that common basis. In order to understand Mead's thought , it is necessary to study Mead's original Pragmatism under his thought. Mead's originality concreatly appears as (1)an essay on communication (2)an essay on act (3)an essay on time (4)an essay on perspective. Analyzing these essays, the fundamentals of his thought could be cleared; his thought describes uncertain human being which lives in complex interaction with society.